# 生徒指導課だより

ー第９号ー　　～鹿高生が日々の振り返りをするためのエッセンス～

２０２０．３．２４

*「鹿西高校の Roots」*　「風雪二十一年」の石碑の正体　　-鹿西高校の誕生-

これから、私たちの母校となる鹿西高校の歴史をひもといて行きましょう。

**①「風雪二十一年」の石碑の正体は？**

能登部駅から第二グラウンド横の門を通過して登校してくる生徒が多くいると思いますが、その門の横に「風雪二十一年」の石碑があることを知っていますか？実は、かつてここに定時制高校がありました。昭和３９年に開校し、昭和６０年に２１年間の歴史に幕を閉じました。「二十一年」というのはこのことを意味していたのです。

**②なぜ定時制（中間・夜間の二部制）高校があったのか？**　（全国的にも画期的）

「♪伝統の布 織るところ～」歌い親しんだ校歌の一節にもあるように、能登上布で有名なこの土地では繊維業が盛んでした。今から６０年ほど前に鹿西の地域では繊維工場がたくさん作られ、働く人が不足していました。当時は高校への進学志向も高まって、中学を卒業してすぐに働く人が減る傾向にありました。そこで働く人をたくさん集めるために地元だけでなく富山県や東北地方などから集団就職として新卒中学生を募集し採用しました。（富山、奥能登、七尾６０名、青森方面９０名、地元４０名）

高校への進学志向も高まり、「中卒で働きながらでも高等学校で学びたい」という人がたくさんいたため、地元の町長や町議会長や企業の人々が強い申し入れをしました。その結果、「七尾城北高校鹿西分校」として誕生しました。（昭和３９年当時全国的にも画期的なことだったそうです）

**③「鹿西高校」としての一歩**

②の定時制高校を基盤として全日制の「鹿西高校」が誕生しました。（昭和４８年）
昭和４８年から６０年までの１２年間、鹿西高校（現Ａ棟）と七尾城北高校鹿西分校（現Ｂ棟）の２つの学校の生徒が同じ敷地内の、別々の校舎で過ごす期間がありました。

**④恵まれない環境**

・定時制のスタート時の校舎は能登部小学校の一角を借りており、肩身の狭い思いをしながら勉学に励んでいました。

・鹿西高校ができても、はじめは校舎がなかったため、鹿西中学校の一角を借りていました。グラウンドも予約している日時しか使うことができず、水たまりの水を雑巾で吸い取り、乾いた土を入れて体育祭などを実行した年もありました。集会は体育館を使えず、廊下で行っていました。

本当はもっといろいろなことがあるのですが、簡単にまとめると左に示したような流れで現在の鹿西高校にたどり着きました。

私たちの学び舎の原点となる定時制高校に通っていた時代の生徒の現状はどのようなものだったのでしょうか。

・親元を離れて働きに出る人が多くいた。
・昼間に働き、夕方から授業を受けて学問を学ぶという日々。
・全日制の生徒を横目に仕事場と学校を行き来する日々。

など、色々な思いを抱きながらの高校生活だったと想像できます。
ここからは、当時の生徒の心境を書き綴ったものを一部省略して掲載します。４人の手記を紹介しますので、一度読んでみて下さい。そして、一緒に自分の日々を振り返ってみてみましょう。

第１回生
～略～
新しい体育館で卒業式だけ済ませた。私たちはせめて二、三日でも新しい教室で勉強はしたかった。でも今は皆様方が立派に受け継いで下され、何一つ心残りはありません。四年間の学園生活で学んだことは大きく活かされています。もしこの四年間を無駄に過ごしたならば常識も針を持つことも料理ひとつ知らない人間になっていたことでしょう。あるときは眠くて何度も頬をつねったり、ぶってもコックリコックリ（眠くて頭が落ちる様子）するときがあった。

第２回生
　私たちは汽車通学なので、学校と仕事時間が合わず、早番の時は一時間早く仕事を終え、遅番の時は三十分遅く仕事につく、この問題で今日これほど苦しまなければならないことを、その頃の私たちは知らなかった。上司の不機嫌な視線を感じながら、同僚たちの目を気にしながら学校へ行く。「学校へ行くのは会社の景気のいい時の話じゃないのか」と言った後輩もいる。学校へ行くお金はすべて自分で出し、自分の力で行っているのになぜこんなに肩身の狭い思いをしなきゃならないのかと私たちは時々話し合う。しかし結論は出ない。

第７回生
～略～
　学業･仕事とのあわただしさの中でこれと言える程の大きな目的もなく淡々とした気持ちのまま通い続けました。授業はもちろん、クラブ、生徒会など全て中途半端でした。時間に押し流されるだけで勉強も身につかず、いらいらがつのるばかりでした。「さあこれから勉強だ！頑張らなきゃ」と意欲満々だが、仕事を終えての授業は疲労と眠気との戦いでした。
　先生の張り切っての授業だが暖かい陽ざしが快く眠りを誘う･････「負けてはいけない」二部制の道を選んだ動機はともあれ自分で選んだ道だもの･･･　閉じようとするまぶたを無理に両手で押し上げたこともしばしばです。なぜ私だけがこんなにまでして学業、仕事と走り続けるのかと思うと全日制の生徒達が妬ましく思われて登校拒否も考えました。
　作業中ミスをすると昼食をとる時間さえなく、機械油で茶色に汚れた手を洗う暇もなく通学バスに乗り込むのが精一杯、真っ白いノートが油で滲むたびに、時間が欲しい！せめてテスト期間中だけでも仕事が休みだったらと思うが、その時に限って作業ミスをして貴重な時間を費やしてしまうのです。情けないやら、悔しいやらで涙がボロボロこぼれる。

第８回生
　私は昭和４６年に入学しました。入学式といっても中学校の制服あるいは私服といったありさまでした。
～中略～
　その年の終わりに鹿西高校全日制が建つという話があり、私たちが３年生になった時、横に建ちました。普段、教室で授業をしている時は見えないのですが、特に調理実習をしている時などは全日制からまる見えで、とても嫌な気持ちでした。
　また、私は汽車通学をしていました。能登部駅におりるのは私と私の友人の３人だけだったのですが全日制が建ってからは全日制の生徒と一緒に通学するようになりました。汽車に乗っていると定時制の校舎を指さして「あれ何の学校やろね」といっているのを良く耳にしました。何となく私たちがとても年がいっているように思えて、その子達が私達をどういう目で見ているのかと思うととてもいやでした。
～中略～
　全日制の校舎が横に建ったため、私たちの学校はとても暗い感じになりました。大きな校舎が裏からそびえ立ち、今にも定時制の校舎をのみこもうとしているようでした。それに二つの校舎をつなぐ（弓道場と自動販売機の前の）通路は私にとっていやな思いを増幅させました。あの通路の真ん中から二つの学校が分かれています。それがそこに学んでいる生徒をも分け、人生までも分けているように思えてならなかった。普通の何の変わりもない通路でしたが、私たちは在学中、一度もあの通路を通りませんでした。これも「ひけめ」と言えばそれまでですが･･･

このような苦学生の努力の礎の上に、現在の鹿西高校、施設、歴史があるのだと思います。自分の母校の Roots を知り、今の自分と重ね合わせて振り返りをしてみましょう。